



重要文化財「松城家住宅」の 塗壁について

その6. 壁面の鍔絵と技法について

早稲田大学理工学術院
嘱託研究員

齋藤金次郎

●はじめに

前号では天井ランプ掛けの鍔絵を紹介いたしました。本号では壁面の鍔絵及び今回の修理工事調査で新たに判明した鍔絵の技法について報告したいと思います。

<竹に雀の図> 1階西縁側書院外壁 (写真-1)

竹に雀の図はジョウダンの間の付書院に設けられた花頭窓の外廊下側壁面に施され、大きさは幅1685mm、高さは1395mmとなっています。図柄は漆喰表面に鍔で波状に引き摺り浅く凹凸を付けた表面に雀が右に二羽、左に三羽飛び、雀は米を腹いっぱい食べた直後でお腹が丸く膨らんでいます。雀の目には黒の彩色がされている。落款印章は記されておりませんが、雀と竹は長八が得意とする図柄で鍔のタッチ更には漆喰の置上げの肉厚状態から長八によって制作されたものと思われます。ふくら雀は豊かさの象徴として願いが込められた鳥となっており、信仰心があつた長八はジョウダンの間という格式のある座敷を重んじ、社寺建築で採用される日本古来の花頭窓と和風のモチーフ及び日本画の要素を融合させ調和した独自の作品を創り上げている貴重な作品と言えます。

<雨中の虎図> 2階南縁側南面壁 (写真-2)

2階応接間の南に続く縁側の中央壁に描かれています。大きさは幅752mm、高さ1692mmで左下には「明九丙子雁来月 / 巧者乾道閑人寫」と落款が塗書きで記され、更に「巧者」「乾道」の印章が朱色で押されている。よつて、明治9年8月に制作されたことが確認できました。図柄は漆喰で作った額縁の中に虎が鋭い槍のような雨の中で口を大きく開けて立っている姿を表現しています。虎の目には玉眼が嵌め込まれ、鼻、口、耳には朱色が塗られています。表面からの観察では、初めに額縁蛇腹を漆喰で制作した後に、中の鍔絵背景部分を漆喰で塗り、鍔で波状に引き摺りしたあとに、虎の鍔絵を描いたものと思われる。背景の漆喰に鍔がくい込んでいる跡等が

見られるので、引き摺り漆喰が柔らかい内に行ったものと考えられます。また落款については晩年の長八は道具にこだわらず、漆喰を筒に入れて搾り出して鍔絵を描いていたとされ、落款もその技法を応用したものと思われます。今日のケーキ等に文字を書く方法と同様の技法で施したものと考えられます。狩野派の絵師は題材として、虎を好んで障壁画や襖等に描いている。狩野派の絵を学んだ長八は障壁画及び掛軸の感覚でこの虎の図柄を描いたものと思われます。更に長八の晩年の鍔絵は富士山を題材とした図柄も多くなっており、当時活躍していた葛飾北斎や安藤広重の影響も大きかったものとも思われます。尚、今回の調査では塗額として制作した後に、壁面に嵌め込んだものであることが確認できました。このことは、これまで長八作品の調査をしてきた中で壁面の鍔絵としては初めて見ることができ大発見と言えます。

<竹笹の図> 2階南縁側北面壁 (写真-3)

2階応接間押し入れの脇壁に描かれています。雨戸を開けた際の外からの視線を意識した位置に施されている。大きさは、幅790mm、高さ1760mmで落款印章は記されていません。図柄は漆喰引き摺り仕上げ面に竹笹のみを描いたものです。鍔の決め込み状態から、雨中の虎図と同様に表面を鍔で波状に引き摺りした後に、追っかけて漆喰を塗り重ね、鍔で押さえ込み竹笹を表現しています。この技法の特徴は素材が土のみで行う場合と今回の松城家のように漆喰で施される例との2種類があり、図柄と構成等が異なりますが現存する建物の中でも漆喰のみで描かれている鍔絵は明治9年の松崎町佐藤家土蔵2階



写真-1 竹に雀の図



写真-2 雨中の虎図と落款印章



写真-3 竹笹の図(工事報告書より)



写真-4 唐草・北面外壁（龍の間・次の間）

の内壁「近江八景図」と松城家のみでしか確認できない貴重な作品と言えます。長八は壁画の制作をする時には、連続画で表現するケースが多いことから、構図と図柄を比較しても雨中の虎と一對のように思われます。

<唐草>北面外壁（写真-4）

2階龍の間、次の間の窗外上部外壁面に描かれている。唐草模様はアール状の額縁蛇腹の中に描かれています。大きさは幅3040 mm、高さ260 mmで漆喰の盛り厚が25 mm程度で落款印章は記されていません。図柄は淡い灰色漆喰面に白漆喰で左右対称の唐草を描いています。下地は周囲の壁面の張り瓦が続いていることから、中塗りまでは外壁仕様と同一のようです。唐草模様の背景の灰色漆喰は顔料を混ぜたものを塗り、その表面に下絵を描いた痕跡が鮮明に残っていることから、生乾き時に下絵を描き一気に唐草を描いたものと思われる。蛍光X線分析では額縁蛇腹及び唐草は漆喰であることが確認できましたが鉍物系顔料の使用は確認できませんでした。鏝の決め込み状態等から弟子によって描かれたものと考えられます。全体的に力強く、滑らかに仕上げられており鏝絵に精通した職人によって施された作品であると言えます。

●鏝絵の技法について

今回の保存修理工事では牡丹図の連珠の欠失部分を除いて保存状態も良いことから、欠失箇所の補修のみとし、一部の鏝絵の後世の修理の有無及び内部の亀裂や欠損部分の確認をするためにサーモグラフィー計測をまた仕様・素材（顔料）等を知るために蛍光X線分析を行いました。サーモグラフィー計測は鏝絵を破損しないように、ランプ掛けの「牡丹図」、「果実図」、「龍図」で実施しました。方法としては天井裏より温め、部屋内部の鏝絵から放散される温度を計測機器で画像撮影をした（写真-5）。その結果は、いずれもランプ掛けは取り付けられた痕跡や後世の修理、内部の破損などが見られませんでした。



写真-5 果実図のサーモグラフィー計測（工事報告書より）

よって、松城家住宅のランプ掛けの鏝絵はいずれも長八が現地で制作したものであることが明らかになりました。因みに大田家の「龍」のランプ掛けは別途で制作されたものを現地で取り付けています。それを考えると松城家住宅の鏝絵制作は重力との戦いであり、神業的な技量があったからこそできた傑作品と言えます。次に、蛍光X線分析は華やかな彩色が施されている「果実図」で行いました（写真-6）。本体及び背景は石灰を主成分とする漆喰であることが認められ、葡萄紫・梨の緑及びあけびの緑は紺青に硫黄と緑青を混ぜた漆喰を塗り、くわえの青はウルトラマリンもしくは紺青を混ぜた砂漆喰を用い、柿のオレンジ色は弁柄と鉛丹を混ぜた漆喰であることが確認でき、果実の鏝絵の彩色技法は砂漆喰や漆喰に鉍物系顔料を使用していることなどが明らかになりました。今回の調査では長八の薄肉レリーフ状の鏝絵技法が一部解明できたことは大きな成果でした。

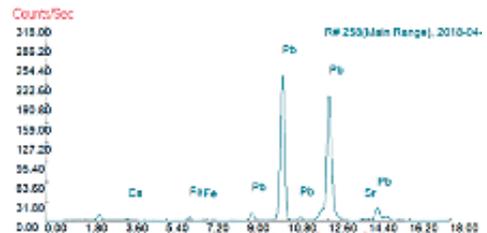


写真-6 果実図の柿（オレンジ）の蛍光X線分析（工事報告書より）

●おわりに

松城家住宅は前述したように、古代中国の風水を基にした家相図で建てられている。それに対して長八は題材及び図柄・材料を選択して、これまで蓄積してきた技で個人住宅に相応しい優れた作品を創り出しています。また左官職人としての立場からも漆喰という素材をふるに活かして和と洋風を組み合わせた最新式の建物と室内空間を作ろうとする意図が随所で見受けられた。今回の修理工事では長八の名前は確認出来ませんでした。施工は地元の大工となっていますが、伝承では長八が漆喰意匠の設計は全て担当したとされている。弟子によると長八は招請され、大邸宅にも鏝絵を施し、更には新式の西洋館に調和するような工夫を凝らしていたと話していることから、洋風建築のデザインも担当していたものと思われる。よって、松城家住宅工事に深く関与していたことは明らかで、鏝絵を制作すると同時に漆喰装飾に関しても長八が指揮を執り、多くの伊豆の弟子達の参加により、当時としては最も斬新な擬洋風の建物を伊豆地域で創り上げたと言える。まさに長八にとって松城家住宅は和と洋式の融合に挑戦し、完成させた集大成の建物であった。

引用・出典・参考文献

- 重要文化財 松城家住宅主屋ほか6棟保存修理工事報告書本文編
公益財団法人文化財建造物保存技術協会 令和4年12月 沼津市